

# 見守りカメラ導入による夜間の見守り改革 ～在宅生活との連携を見据えた第一歩～

久晴会グループ

株式会社山梨福祉総研

看護小規模多機能型居宅介護かのん

# 事業所概要



施設名	久晴会グループ 株式会社山梨福祉総研 看護小規模多機能型居宅介護かのん
施設種別	看護小規模多機能型居宅介護
定員	29人
開設日	2021年4月1日
所在地	〒400-0117 山梨県甲斐市西八幡3822-1

# 伴走支援に応募した動機

---

## 応募動機

山梨県甲斐市において「かのんの看多機があるから安心」と  
地域の方々に実感していただける存在を目指している



看多機は、通い・泊まり・訪問を柔軟に組み合わせられる点が最大の利点だが  
業務の煩雑化や、少人数体制における介助負担の増大という課題を抱えている

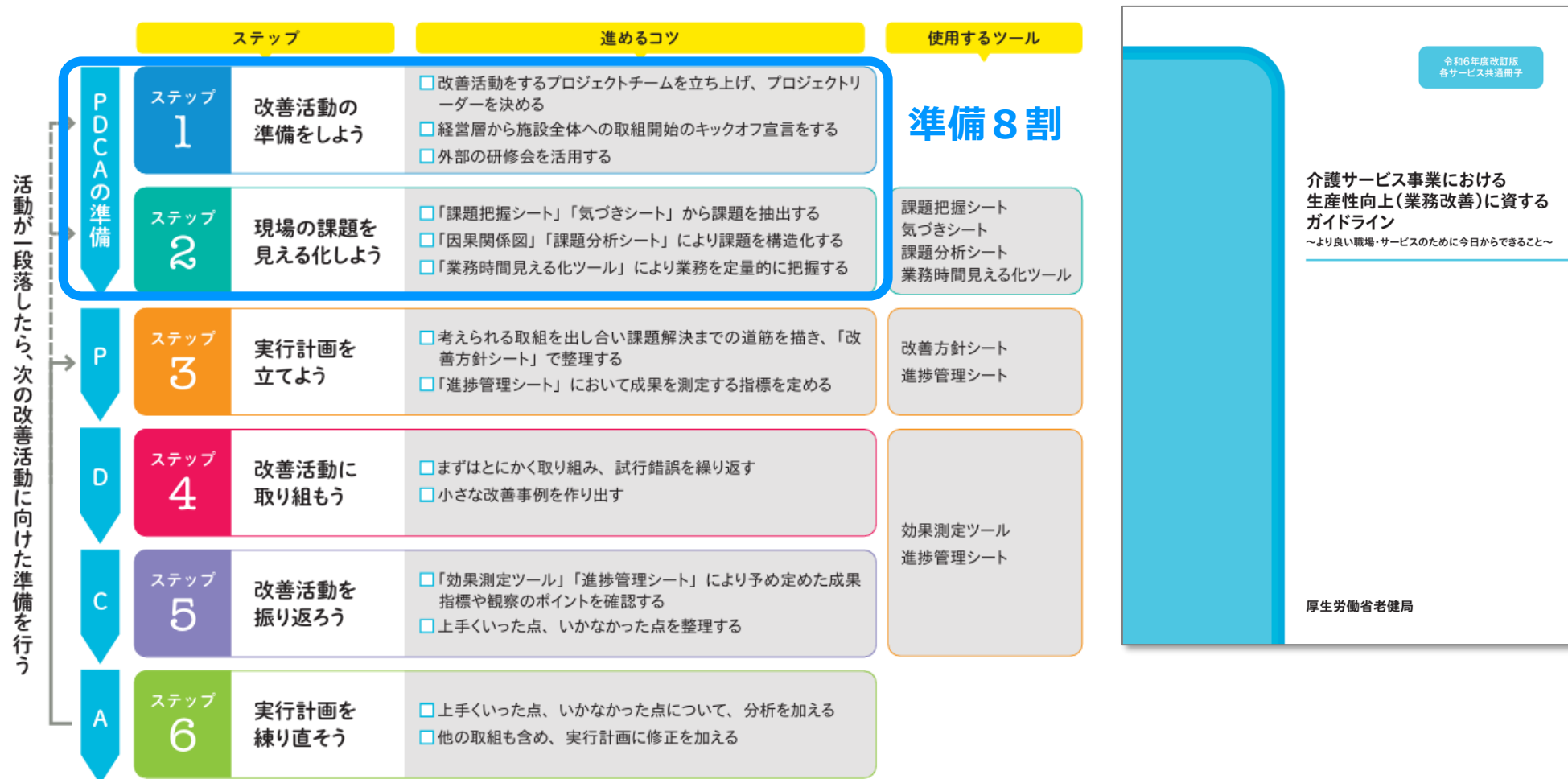


職員が働きやすい環境を作るため

**テクノロジーを「利用者のQOL向上」と「職員の心身のゆとり」を生むためのパートナー**  
として活用したいと考え、応募した

# 取組み方針

今回は、厚生労働省が2025年8月に改訂した『生産性向上ガイドライン』（共通冊子）のステップ<sup>①</sup>1～6に従って取組みを進めた（特に、「準備8割」を重要視した）



# ステップ 1



令和6年度改訂版  
各サービス共通冊子

## 介護サービス事業における 生産性向上(業務改善)に資する ガイドライン

～より良い職場・サービスのために今日からできること～

厚生労働省老健局

# ステップ1：改善活動の準備をしよう

## 実施したこと

### 生産性向上の取組みを推進するにあたって、プロジェクトチームを結成した

#### <取締役事業部長が語った！職員と共有した内容>

- 少子高齢化や、生産年齢人口が減り、2025年問題・2040年問題と言われる状況下でも介護人材が減っても質を落とせない分野であり  
かのんとしても、会社全体として生産性向上に取り組んでいきたい
- 生産性向上は、職員負担を減らしていくための取組になるので現場・経営陣両サイドで情報を共有して取組んでいければと思う
- 10年、20年先も、かのんとして質が担保され職員が嬉々として働ける環境を目指したい



キックオフ宣言の場面

# ステップ2



令和6年度改訂版  
各サービス共通冊子

## 介護サービス事業における 生産性向上(業務改善)に資する ガイドライン

～より良い職場・サービスのために今日からできること～

厚生労働省老健局



# ステップ2：現場の課題を見える化しよう

## 対話から見えてきたこと

### 対話から明確になった、具体的な課題

- センサーマットと利用者状態がマッチしていない

- センサーが鳴ってから訪室するとすでに利用者が歩き始めている
- センサーを跨いでしまう利用者がいて、センサーが正しく使えないケースがあった
- センサーが頻回に鳴る利用者の通知音が、他利用者の気を逸せてしまう

- 優先順位に迷う

- 対応中にセンサーやコールが同時に鳴ってもすぐ対応ができない

- 職員の精神的疲弊

- 利用者がドアの締切を望んでいる中、何回も開けて確認できず不安



職員での対話の場面

# ステップ3



令和6年度改訂版  
各サービス共通冊子

介護サービス事業における  
生産性向上(業務改善)に資する  
ガイドライン  
～より良い職場・サービスのために今日からできること～

厚生労働省老健局

# ステップ3：実行計画を立てよう

## 実施したこと

### ありたい姿を実現するためにアプローチ（仮説）を立てた

#### ありたい姿

- 看多機として、在宅生活との連携を強化するために、睡眠データをケアに活かしたい
- 業務を回すのが精一杯なので、職員の負担を減らしたい

#### 課題

- 使用センサーと利用者状態がマッチしていない
- 優先順位に迷う
- 職員の精神的疲弊

#### アプローチ

- 見守りカメラ（パシエントウォッチャープラス）を新規導入
  - ・ カメラ設置基準作成
    - カメラ設置の目的認識の共有
    - 統一した認識でのカメラ設置
  - ・ センサー・コール対応優先順位目安表
    - 同時に鳴った場合の判断基準

# ステップ3：実行計画を立てよう

## 仮説の検証（アクションを起こす前に現状のデータを測定）

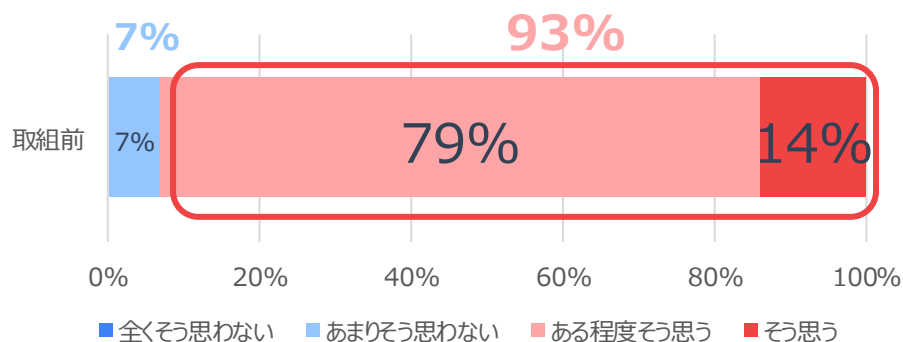
### 【優先順位に迷う】

- 複数のコールが同時になると**優先順位に迷ってしまう**

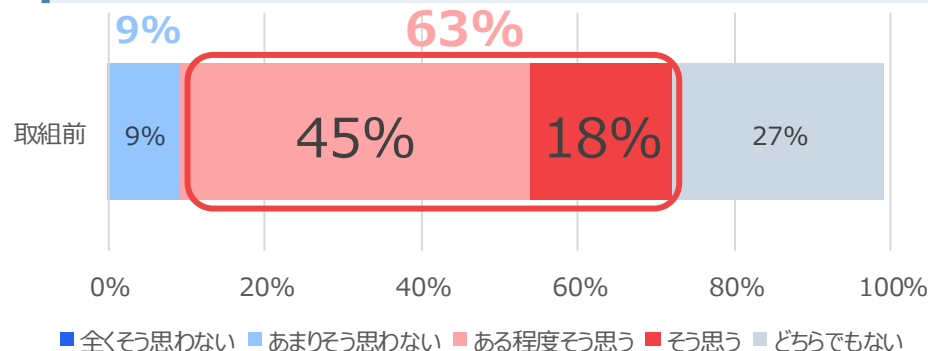
### 【職員の精神的疲弊】

- いつも忙しくて**疲弊している**

ナースコールやセンサーコールが複数同時になった際に、対応すべき利用者の優先順位について迷うことは多いですか？



いつも忙しくて疲弊していますか？



# ステップ4



令和6年度改訂版  
各サービス共通冊子

介護サービス事業における  
生産性向上(業務改善)に資する  
ガイドライン  
～より良い職場・サービスのために今日からできること～

厚生労働省老健局

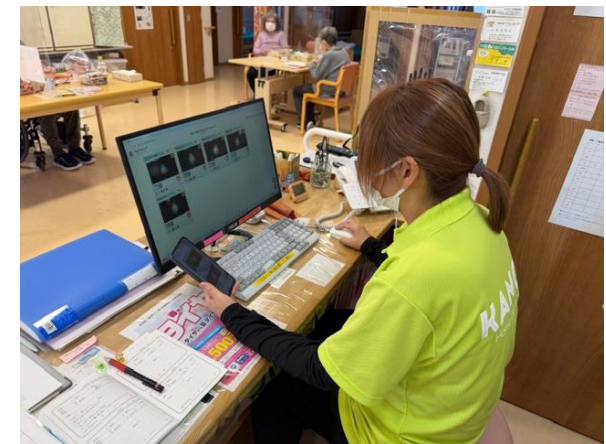
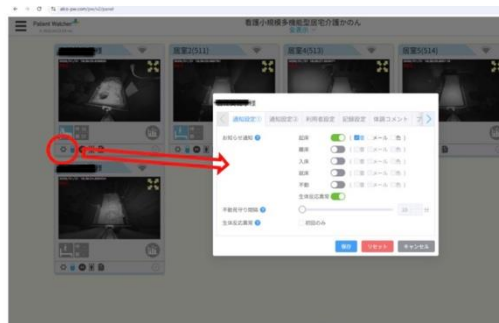
# ステップ4：改善活動に取り組もう

## 導入を決めたテクノロジー

### ●商品名：ペイシエントウォッチャープラス

### ●選定理由

- ・ 利用者ごとの通知設定ができる
- ・ カメラを設置した居室のデータとしてではなく、利用者個人に紐付けられるため泊まりの利用者が日々変わる看多機にマッチしている
- ・ 使い方がシンプルだと感じた
- ・ カメラのデザインが主張しすぎず居室に馴染んで良かった
- ・ デモをした際、他の機器に比べエラーがなかった



# ステップ4：改善活動に取り組もう

## 実施したこと

### カメラ・コール設置について

#### ● 設置基準・ルールを明確にした

カメラ設置基準

緊急度↓	利用者の特徴						カメラ設定 コール設置	職員の対応/ポイント		
	起き上がり	立ち上がり	歩行	認知機能	呼吸を 確認	心拍を 確認				
A: すぐ訪室	A1	—	—	—	—	12~16外	70~80外	・バイタル異常	異常値即訪室	・省取り ・急変有り
	A2	・一部介助 自立	・全介助 部分介助	・自力 見守り	—	—	—	—	・起床 コール	即訪室
B: 訪室	B2	同A1	同A1	同A1	—	—	—	・離床 ・コール	(エアコン・空腹の訴え) 優先順位down	
C: 訪室なし	C1	自立	自立	自立 見守り歩行	見守り自立	—	—	・カメラ不要 ・必要時カメラ確認 ・離床検知	・データ確認 ・状況改善しなければB対応	・自立の方のコール (トイレの訴え) ・歩行見守り
	C2	自立	自立	自立 見守り歩行	自立	—	—	・カメラ不要 ・必要時カメラ確認	・睡眠状況の把握 ・2時間毎の巡視	・睡眠状況を確認する 必要に応じ対応

① すぐ訪室 (A1~3) ・ 訪室 (B1~2) ・ 訪室なし (C1~2) に分類  
 ② 起き上がり、立ち上がり、歩行、認知機能、呼吸、心拍で利用者の特徴を分類  
 ③ カメラ設定方法・コール設置  
 ④ 職員の対応とポイント

# ステップ4：改善活動に取り組もう

## 実施したこと

### 優先順位の目安について

- 利用者ごとにセンサー対応の優先順位・巡視について明確にした

No	利用者名	優先度	巡視	備考欄	No	利用者名	優先度	巡視	備考欄
1	A	高い		トイレ使用	10	J	場合によっては高い		トイレ使用 ドア締め切り
2									Pトイレ使用 呼吸苦あり
3									寝たきり 嘔吐することあり
4									トイレ使用 ドア締め切り
5	E	高い		Pトイレ使用 起床時意識消失することあり	14	N	低い	2時間ごと体交・様子確認	寝たきり
6	F	場合によっては高い		寝たきり コール頻回	15	O	低い	2時間ごと体交・様子確認	寝たきり
7	G	場合によっては高い		トイレ使用	16	P	低い		臥床後は起床までコールなし
8	H	場合によっては高い		Pトイレ使用	17	Q	低い		トイレ使用 ドア締め切り
9	I	場合によっては高い		トイレ使用 ドア締め切り					

- ①利用者ごとに優先度を高い・場合によっては高い・低い分類明記
- ②巡視者と巡視内容明記
- ③備考欄（利用者の特徴など記載）

センサー・コール対応優先順位目安表

# ステップ5



令和6年度改訂版  
各サービス共通冊子

介護サービス事業における  
生産性向上(業務改善)に資する  
ガイドライン  
～より良い職場・サービスのために今日からできること～

厚生労働省老健局

# ステップ5：改善活動を振り返ろう 成果①

「課題抽出アンケート」(生産性向上くん®)にて課題のあった業務

課題項目	実施前	実施後	比較
入浴に課題	54%	45%	9%改善
見守りに課題	36%	18%	18%改善
記録・書類に課題	36%	45%	9%悪化

1月に、開設依頼初めて定員に達したことで利用者情報が増え、手書き・入力など業務負担が増加した

※各割合を四捨五入して表示しているため、合計が必ずしも100%にならない場合があります

## ステップ5：改善活動を振り返ろう 成果②

### 夜間訪室回数

項目	実施前	実施後	比較
利用者1人に対する 夜間の訪室回数	4.70	3.44	1.25回改善

最大受け入れ可能利用者数5人と考えて、

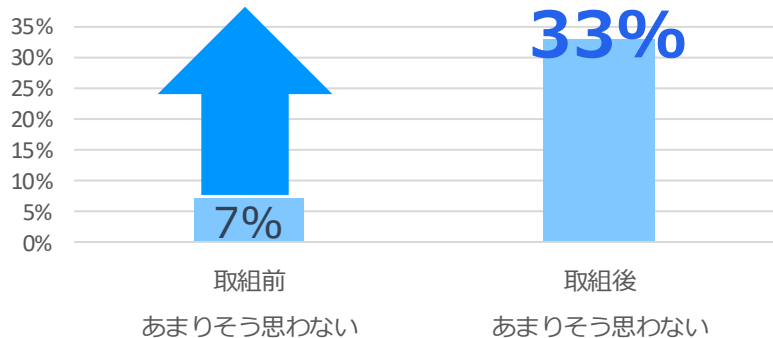
1ヶ月換算で **175回**の夜間の訪室回数減少

※各割合を四捨五入して表示しているため、合計が必ずしも100%にならない場合があります

## ステップ5：改善活動を振り返ろう 成果③

ナースコールやセンサーコールが複数同時になった際に対応すべき利用者の優先順位について迷うことは多いですか？

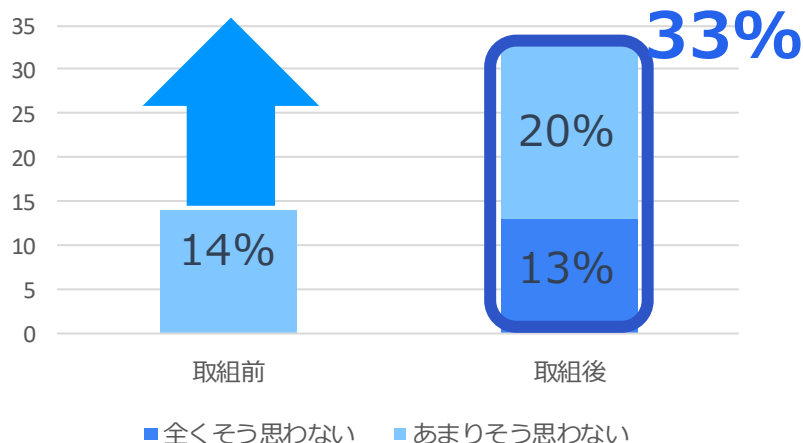
- 優先順位に迷わなくなってきた職員が26%増加した



優先順位に  
迷わなくなってきた職員が  
増えた

定期巡回やセンサーが鳴って訪室したことで利用者の睡眠を阻害したと感じたことはよくありますか？

- 訪室で利用者の睡眠を阻害したと思わない職員が19%増えた

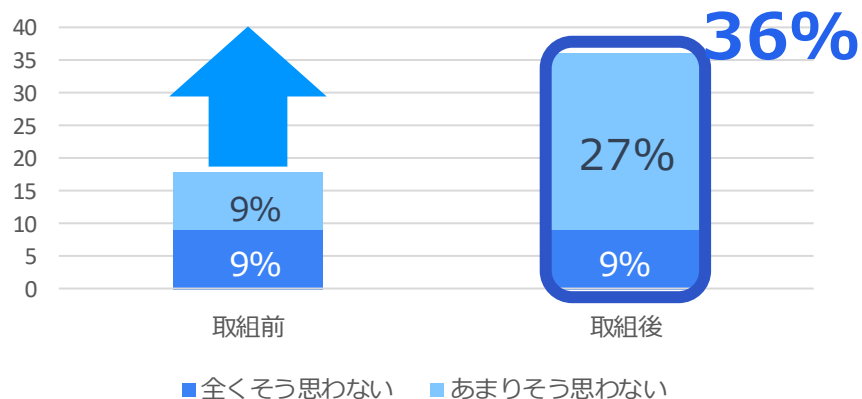


利用者の睡眠を  
阻害する訪室が  
減ってきている

## ステップ5：改善活動を振り返ろう 成果④

### 突発業務が多いと思いますか？

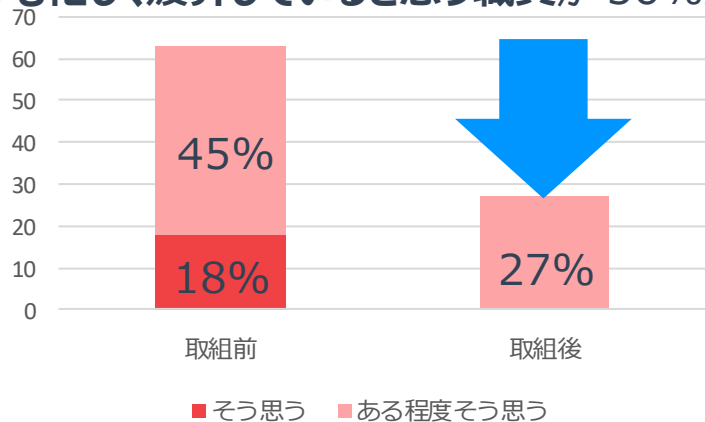
- 突発業務が多いと思わない人が18%増加した



突発業務が多いと  
思わない人  
**倍増**

### いつも忙しく疲弊していると思いますか？

- いつも忙しく疲弊していると思う職員が 36%減少した

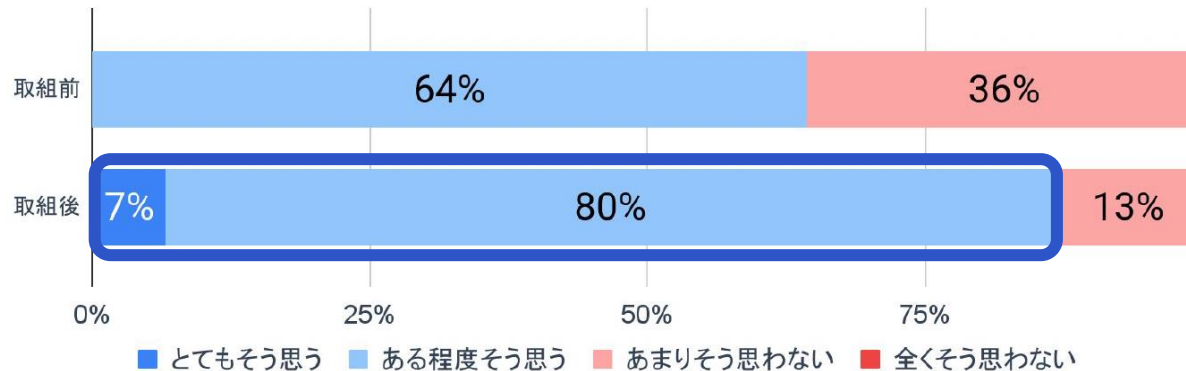


いつも忙しく  
疲弊している職員が  
**減った**

## ステップ5：改善活動を振り返ろう 成果⑤

### 利用者の睡眠習慣・リズムを把握できていますか？

- 利用者の睡眠習慣やリズムの把握がしやすくなった職員が26%増加した



利用者の睡眠習慣や  
リズムが把握  
できるようになった

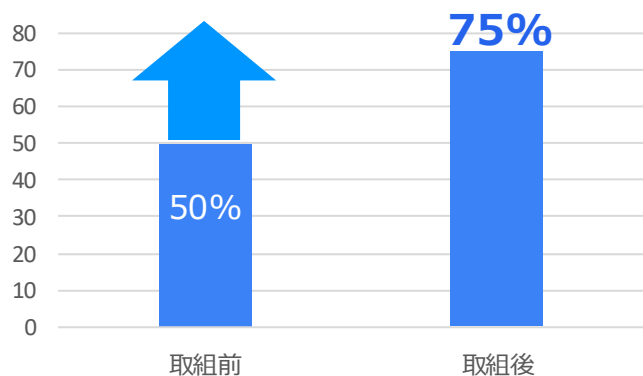
### 睡眠習慣・リズムを把握できて、ケアに活かされたこと

- 実際の睡眠状況が正確に把握でき、睡眠の質が悪かった時は、日中の職員に傾眠への注意を促せた
- 日中の利用者様の「寝させて」という言葉の裏にある「真のニーズ」をアセスメントするヒントになった
  - 睡眠データがあることで、本当に寝不足なのか、「退屈」と言っているのか判断できるようになった
  - 「退屈」と判断できた場合は、「散歩に誘う」「個別リハや脳トレをする」など具体的な活動を提案できた

# ステップ5：改善活動を振り返ろう 成果⑥

## 利用者の生活・認知機能について

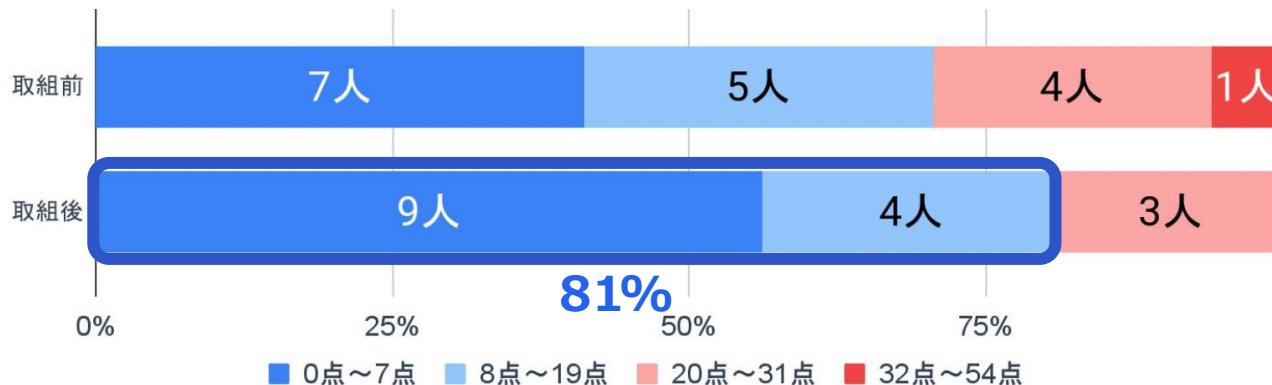
- 「生活・認知機能」について1~3点が1人増えた



利用者の  
「生活・認知機能」が  
改善した

## 職員の心理的負担について

- 職員の心理的負担が19点以下の割合が11%増えた

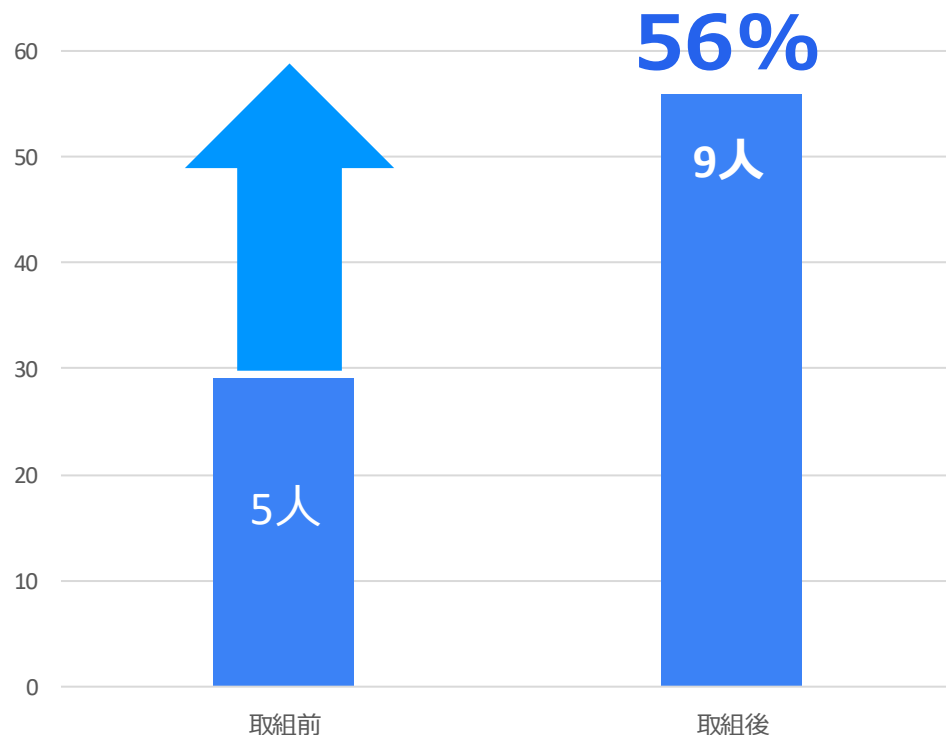


8割の職員が  
心理的負担が  
少ないと回答

## ステップ5：改善活動を振り返ろう 成果⑦

### モチベーションの変化【仕事のやりがい】

- 「やりがい」を感じる職員が4人増加した



**「やりがい」  
を感じている職員が  
増加**

## ステップ5：改善活動を振り返ろう 成果⑧

### 現場から見た成果

取組前は職員は課題を愚痴としてその場で終わっていたが

今はどうすればその課題を解決できるのか

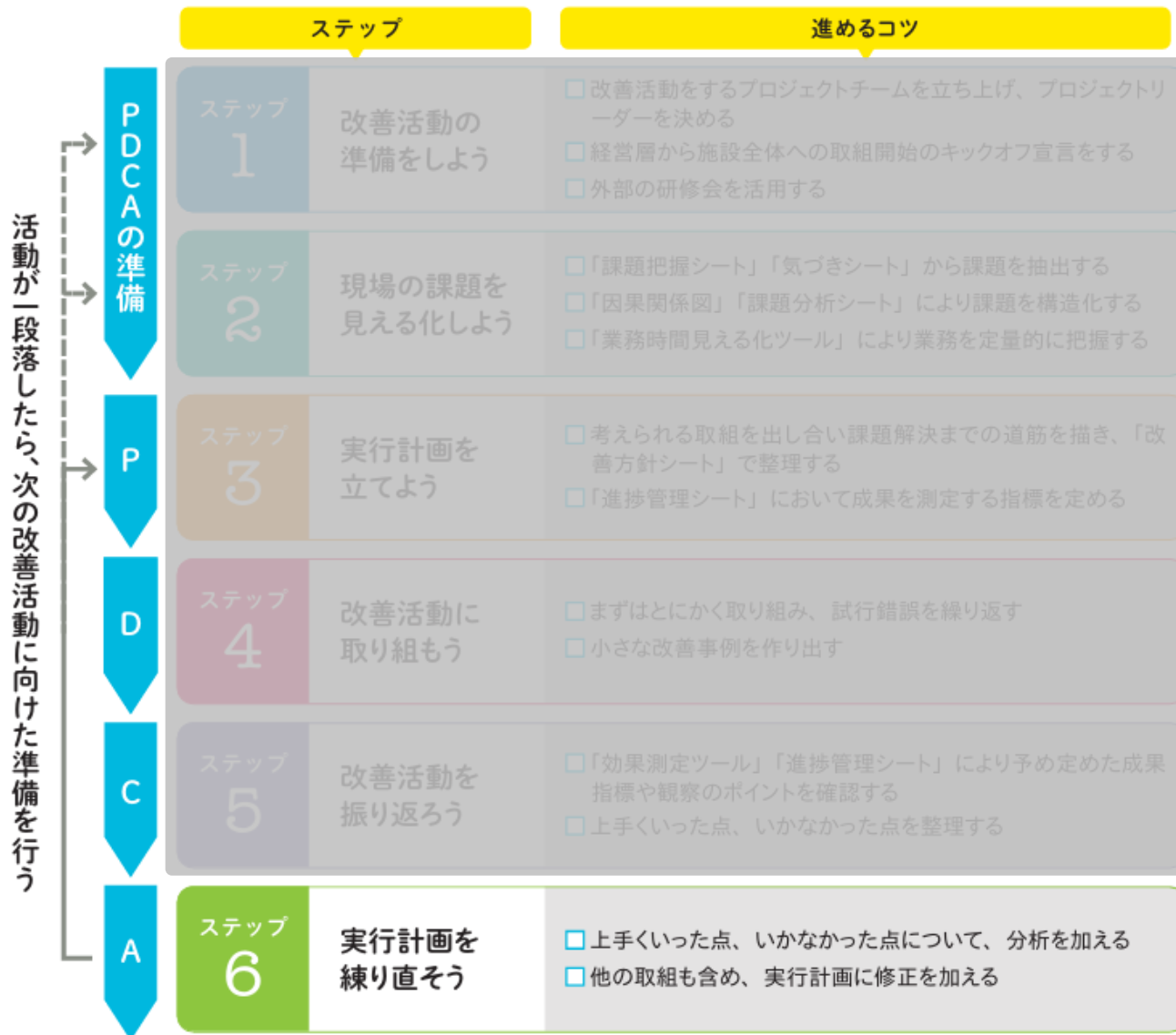
職員同士考え「**自分ごと**」として課題に向き合い解決策を考える文化にかわった

睡眠データや、睡眠アセスメントを踏まえて、利用者が何を求めているのか

どんな日中活動を行うといいのか考え、実際にアプローチした内容については

**家族に根拠を持って説明でき、在宅生活と連携したケアや、家族の安心感につながった**

# ステップ6



令和6年度改訂版  
各サービス共通冊子

## 介護サービス事業における 生産性向上(業務改善)に資する ガイドライン

～より良い職場・サービスのために今日からできること～

厚生労働省老健局

# ステップ6：実行計画を練りなおそう

## 新たな課題とありたい姿に向けた次なる取り組み

### 新たな課題

今回の取り組みにより利用者情報の共有はしやすくなった

一方、利用者が増えたことにより必然的に情報量が増え、それに伴い記録量が多くなった。

今までのような記録方法では記録が追いつかず、手書き・入力の重複や、記録の内容の個人差など、ムリ・ムラ・ムダが生じ、新たな課題感が出てきている

### 次なる取り組み

#### 記録業務の標準化

- 今回見守りの基準を作って職員の認識を合わせたように、記録についても記録の重複やバラつきを解消するため、まずは「記録の書き方基準・ルール（5W1H）」を明確にし、見える化を図る
- 全職員に対し、記録業務の「何が、どのように大変か」をヒアリングし、現場の負担となっている真因を特定する
- 5W1Hに基づいた基準をベースに、ヒアリングで得られた改善点を反映する全職員が迷わず、かつ簡潔に記入できる新たな運用ルールを共有し、情報の質を保ちながら負担軽減を目指す

#### 「利用者と向き合う時間」への還元

- これらの取り組みによって生み出された余剰時間を「利用者と落ち着いて関わる時間」として明確に位置づけ、業務の効率化を「ケアの深化」に繋げ、職員のやりがいと利用者の満足度をさらに高めていくことを目指す

# まとめ

# プロジェクトを通して感じたこと

## プロジェクトを通じて得た学び、感じたこと

リーダーが、現場の意見を放置しないように意識したことが、職員が「自分ごと」として考える後押しになったと思う

コミュニケーションが円滑になったのは、職員とコミュニケーションをとる際に必ず感謝の気持ちを伝え、絵文字やスタンプも活用しながら業務的になりすぎないように工夫したことが良かったと思う

今回課題解決プロセスがわかったことで、職員で対応ノウハウが共有されたので次も「ただ課題が変わっただけ」と捉え、今回のアプローチを応用して取り組む雰囲気が高まっていることが嬉しい

# 経営者からのコメント



久晴会グループ  
株式会社山梨福祉総研  
取締役事業部長 小林正樹

ここ数年様々な分野で「生産性向上」というキーワードが周知されてきました。弊社においても経営陣や管理職においてはその意味や目的について共有してきましたが、会社全体への周知やその風土づくりに苦慮する場面もみられました。

そこで弊社では、職員で編成する「業務改善チーム」を結成しました。これは、生産性向上の取り組みを単なる手段と捉えず業務課題から解決方法抽出、生産性向上への取り組みの流れを構築するものです。

今回の取り組みについても、弊社看多機チームを山梨県の伴走支援モデルとしてご支援をいただき、周知から導入までスムーズな取り組みを行う事ができ、スタッフ主導にて生産性向上に向けた取り組みが行えました。

生産性向上は行う事が目的ではなく、人材確保や職員の職場環境改善による負担軽減、サービスの質の向上、ご利用者様への還元に繋がる継続が重要だと考え、今後も法人全体で取り組んで参りたいと思います。



「やりたい」を「できた」にかえる

